



**Data**

監督・原案・脚本: ジャンニ・アメ  
リオ

原作: ロレンツォ・マローネ  
『La tentazione di essere felici』  
(しあわせであることの誘惑)

出演: レナート・カルペンティエー  
リ/ジョヴァンナ・メッゾジ  
ヨルノ/ミカエラ・ラマツ  
オットィ/エリオ・ジェルマ  
ーノ/グレッタ・スカッキ/ア  
ルトウーロ・ムセッリ/ジュ  
ゼッペ・ゼーノ

## 👁️👁️ みどころ

一説によると、弁護士は“隣人”にたくない人種の代表らしいが、長くナポリに住む頑固な老弁護士ロレンツォと、隣に引っ越してきた若夫婦との隣人ぶりは？

“アメリカン・ニューシネマ”や“ヌーベル・ヴァーク”は聞き慣れた言葉だが、“ネオ・リアリズム”とは？本作のテーマは“父娘の確執”だが、“21世紀のネオ・リアリズム”たる本作で巨匠ジャンニ・アメリオは、それをいかなる視点で？いかなる映像で？

中盤で勃発する殺人事件にはビックリだが、そこから展開していく疑似の父娘関係の模索と成りすましは何とも意外。先生！そこまでやるの！

ちなみに、娘の職業は法廷通訳。本作では冒頭とラストの法廷シーンを前提として、ラストの父娘の姿に再生の可能性がチラリ。それに注目！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■現代を描く“21世紀のネオリアリズム”とは？■□■

「アメリカン・ニューシネマ」や「ヌーヴェル・ヴァーク」は日本人にも聞きなれた言葉だが、「ネオ・リアリズム」になると少し難しい。その意味について、キネマ旬報映画総合研究所編の『映画検定公式テキストブック』200頁は、「第二次世界大戦末期から終戦直後のイタリアで生まれた、人間社会の諸活動をリアリスティックなタッチで描いて、イタリアの生の姿を現出させた映画の総称。」と解説している。続いて『無防備都市』（45年）、『自転車泥棒』（48年）、『揺れる大地』（48年）などが代表作。資金難なこともあってセットを組むより、戸外でのロケーション撮影を主にし、素人や無名俳優を用い、飾りを

剥ぎ取り現実を直視する映像を作り上げた。」とも書かれている。しかして、本作のチラシには「現代を描く“21世紀のネオレアリズモ”」の文字が躍っているが、その意味は？

本作の監督・原案・脚本は、1945年生れのイタリア人監督ジャンニ・アメリオ。私は彼の作品を観たことがないが、パンフレットには「35年のキャリアで長編作品12作と寡作だが、イタリアのみならずヨーロッパを代表する名匠である。」と書かれている。また、チラシによると、物語の核心は「父と娘の確執、つかの間の疑似家族、そして事件は起こった・・・」とあるから“21世紀のネオレアリズモ”は興味津々だ。

## ■□■こんな娘！こんな父親！住む部屋は立派だが・・・■□■

老弁護士ロレンツォ役で主演したレナード・カルペンティエーリは、本作でイタリアのアカデミー賞であるダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞をはじめ、イタリアの国内主要映画賞で三冠を達成した。また、その長女でシングルマザーのエレナ役を演じたジョヴァンナ・メッゾジョルノも、各映画賞にノミネートされたようだ。本作冒頭で両者が見せる演技は味わい深いが、“こんな娘”と“こんな父親”の亀裂は深そうだ。

冒頭では法廷通訳の仕事をしているエレナのイライラぶりが目立つが、それは一体なぜ？続いて、アパートの階段をつらそうに手すりにつかまりながら上っていくロレンツォの姿が映し出されるが、部屋の中に入ると、その広さと豪華さにビックリ！しかし、彼のセリフを聞いていると、この部屋の権利を巡って、長女エレナとクラブを経営している弟のサヴェリオとの間でもめていることがわかる。もっとも、“21世紀のネオレアリズモ”は近時のわかりやすい邦画とは異なり、セリフを極端に抑え、俳優の表情だけで観客が理解することを求めるから、実のところ、なぜこの父娘関係がこれほど険悪なのかはわかりにくい。しかし、物語が進行するにつれて、かつてロレンツォが愛人を家に連れ込んだ際に、エレナが鉢合わせしたため、エレナはそれによって母親が心を病み死んでしまったと信じ込んでいるらしいことがわかってくる。そんな場合、ちゃんと家族会議を開いて、娘や息子に浮気的狀況を説明し、詫びるところは詫びればいいのかもかもしれないが、元(?)一流弁護士として鳴らしたロレンツォには、それができなかったようだ。

劇中のロレンツォが何歳かわからないが、ロレンツォを演じるレナード・カルペンティエーリは1943年生れだから、私より6歳年上。歩く姿のヨタヨタぶりや、弁護士の仕事は今全くしていないと語るロレンツォに比べれば、まだ現役の弁護士兼映画評論家活動をしている私の方がずっと元気だが、よく考えてみると、彼の偏屈さは私も良く似たようなもの・・・？妻が亡くなった後、ロレンツォは広いアパートに1人で住み、炊事、洗濯等を自分でやっているそうだが、それはきっと、雇った家政婦を次々とクビにしているからに違いない。そんなロレンツォにとっては、エレナの一人息子フランチェスコ(レナート・カルペンティエーリ Jr.)と遊ぶのが唯一の安らぎのようだが、学校から連れ出して一緒に喋っていると、体調を崩して入院していたロレンツォに対して、開口一番「死んで

なかったの？」と憎まれ口を叩いてきたから、この母親にしてこの子あり、この爺さんにしてこの孫ありだ。

## ■□■こんな“隣人”は迷惑？それとも？■□■

本作の原題は『La tenerezza』。そして、イタリア映画祭2018で上映された時の邦題は『世情』だった。しかし、今般日本で公開されるについての邦題は『ナポリの隣人』とされた。それは、ロレンツォの隣の部屋に引っ越してきた若夫婦ファビオ（エリオ・ジェルマーノ）とミケーラ（ミカエラ・ラマツォッティ）、また、その二人の子供たちが、本作でジャンニ・アメリオ監督が目指した「ざわめく感情の物語」の上で、大きな役割を果たすためだ。

大きなアパートの上層階に昔から住んでいるロレンツォの毎日の階段の上り下りはつらそうだが、階段を上がっていたある日、1人で階段に座っている若い女性ミケーラを発見したから、ロレンツォが彼女に声を掛けたのは当然。すると、何と彼女は「家の鍵を置いたまま外に出たので、入ることができない」と説明したから、この女性はかなりのおあわて者らしい。そこで、ロレンツォはミケーラを自分の部屋に招き入れたから、私ははっきり、彼女の家族が戻ってくるまで自分の部屋の中で待たせるのだらうと思っていたが、それは間違いだった。つまり、ロレンツォの部屋から庭に出ると、その庭を通じてロレンツォの部屋とミケーラの部屋は連絡していた上、ミケーラの部屋もかつてはロレンツォの所有だったというから、ビックリ！もちろん、庭を通じたミケーラの部屋への門の鍵はかけられていたが、これまでその鍵もロレンツォが持っていたようだから、本当はそれは問題あり・・・？さらに、そこでまたミケーラはカギを忘れそうになったから、そんなユーモラスな“ナポリの隣人ぶり”はあなた自身の目でしっかりと。

ミケーラは自分でも「忘れっぽい性分で・・・」と弁解していたが、何といっても、美人で陽気だから、ロレンツォと一緒にしゃべっていて楽しいのは当然。その結果、急速にロレンツォとミケーラ行き来が頻繁になると共に、時々遊びに来る2人の子供たちとロレンツォは、本当の孫であるフランチェスコ以上に仲良くなっていったから、そんな隣人の登場は迷惑ではなく大歓迎！なるほど、これなら『ナポリの隣人』という新しい邦題にも納得だ。

一説によると、弁護士は隣人にしたくない人種の代表らしいが、さて、若いミケーラにとって頑固そうな老弁護士ロレンツォの隣人ぶりは？そう思っていると、妻を失い娘とも息子ともほとんど口を利かない状態になっているロレンツォは意外にも「ナポリの隣人」になったミケーラと実の娘エレナ以上の親しい仲に。他方、ミケーラの方も、なぜかロレンツォになついていたから、その良好な隣人ぶりに注目！

## ■□■殺人事件が勃発！こりゃ、一体なぜ？■□■

私はヨーロッパ旅行に一度だけ行ったことがあるが、残念ながら、イタリアへもナポリへも行ったことがない。本作では、邦題を『ナポリの隣人』としている分だけ、ロレンツォがナポリの街を歩き回り、ナポリの街の雰囲気を楽しませてくれるので、それを楽しみたい。もっとも、本作で感じるナポリの街は、美しい観光地というよりむしろ、オートバイが走り回る喧噪の街という感がある。また、ファビオが働いている造船ドックでロレンツォがファビオと2人で話した時に、ファビオはロレンツォに対してナポリの街での生活の不安を口にしていたが、それはひょっとして、日本で京都で住み、生活することの不安と同じようなもの・・・？そう思っていると、ロレンツォはファビオに対して「こうしましょう。私は隣にいる、ノックすればいい。この町のやり方です。」と励ます対応をしていたから、結局ファビオがなぜナポリの街での生活に不安を感じていたのかは、私にはわからないままとなった。

そんなある日、外出先からロレンツォが戻ると、アパートの前におびたしい数のパトカーが停まっていた。警察の制止を無視して部屋に戻り、隣室に入ると、そこには拳銃を握りしめたまま横たわるファビオの遺体が！ファビオはミケーラと2人の子供を撃った後に自殺したらしいが、こりゃ一体なぜ？そういえば、事件の少し前の日、ショッピングモールのカフェで偶然ミケーラ一家を見つけたロレンツォは、家族団らんの楽しいそうな風景を遠くから微笑ましく見ていたが、そこでしつこく物売りを迫る移民の男に対して突然ファビオが正気を失ったかのように大声をあげて掴みかかっている騒動があったから、ファビオには少し異常な性格が・・・？そのことについて、ミケーラは「夫は悪い人じゃないんです。疲れているとカッと成って」と言っていたし、ドックで話したときのファビオも穏やかな青年だった。ひょっとして、移民の多いナポリの街での生活がファビオに何らかの精神的な不安を生ませている・・・？ジャンニ・アメリオ監督はこの殺人事件の原因や動機について全く説明してくれないから、なぜファビオがこんな行動に走ったのかについては、各自しっかり考えたい。

## ■□■そこまでやるか！こりゃ、やり過ぎ！地元の尊敬は？■□■

『ナポリの隣人』と題された本作は、イタリアの巨匠ジャンニ・アメリオによる山田洋次監督ばりの人情味あふれる父娘の物語。そう思っていたのに、本作中盤にはサスペンス映画のような殺人と自殺事件が発生したから、私はビックリ！もっとも、サスペンス映画なら、その後、ファビオによる妻殺害とその後の自殺にどんなからくりがあったのかの解明が焦点になってくるはず。しかし、本作はそうではないから、その後はロレンツォがミケーラの父親に成りすまして、ほとんど回復の見込みのないままベッド上で眠っているミケーラを見守るシークエンスに移っていく。2月16日に観た『ちいさな独裁者』（17年）は、脱走兵のヘロルト上等兵がたまたま見つけたナチス将校の軍服を着たところ、他の脱走兵から「大尉殿！」と声をかけられ、「お供させて下さい」と言われたところから、

ヘロルトのナチス将校へのなりすましと“ヘロルト親衛隊”での独裁が始まったが、本作でもロレンツォが父親になりすまして、ずっとミケーラのベッドの側にいるのは、たまたま病院側が父親と間違えたためだ。しかし、いくらミケーラのことを気にかかっても、またいくら老獪な弁護士だといっても、普通はそこまでやらないはずだ。

ファビオの妻の母親アウロラ（グレッタ・スカッキ）が病院にやってきたことによって、ロレンツォは“成りすまし”をやめたが、彼がそこまでやったのは一体なぜ？また、2人の語らいの中で、アウロラは、「あの子を救えなかった」と後悔を語ったのに対し、ロレンツォは亡き妻への後悔を素直に語っていたが、それは一体なぜ？

他方、アウロラはロレンツォがミケーラの父親に成りすましてミケーラの側で見守ってくれたことを感謝したが、それがバレると、病院が警察に通報したのは仕方ない。しかし、警察署でもロレンツォはあくまで“オレ流”を貫いていたし、駆けつけてきたエレナがせっかく、「孤独な父が隣人と心を通わせた。思いやりでやったことだ」と弁明してくれているのに、ロレンツォは、「私の気持ちがお前に分かるか！」と悪態をついたから、エレナはたまったものではない。ちなみに、この段階に至ると、ロレンツォは地域の尊敬を集めるベテラン弁護士ではなく、カネのためにかなり悪い仕事もやってきた弁護士で、警察でも悪評判だということが、私たちにバレてくるので、それにも注目！

『ちいさな独裁者』のヘロルトは最終的に絞首刑とされたが、ロレンツォの“成りすまし”は刑事事件として起訴されるほどのものではない。したがって、ロレンツォは無事釈放されたが、今や父娘関係は最悪！しかも、ミケーラが元気になり、「無理しちゃいけません。薬は飲みました？お家に帰らないと」と語りかけてくる夢をみたにもかかわらず、そのミケーラが白いシーツに包まれていることを知ると、ロレンツォはそのままアパートから姿を消してしまったからエレナは心配だ。ひょっとして、ロレンツォもどこかでヤバイことに・・・？

## ■□■父娘関係は完全にアウト？それとも・・・？■□■

私は15年くらい前に中国人の刑事事件を担当した時に、法廷通訳の重要性を痛感したことがある。つまり、自分が個人的に知っている法廷通訳なら信頼できるが、法廷ではじめて会ったばかりの法廷通訳では、ホントに私の言葉や被告人がしゃべっていることを正確に通訳してくれているのだろうかと不安になったわけだ。その不安は、『私は貝になりたい』（16年）の法廷シーン見ても明らかだ（『シネマ21』208頁）。

しかして、エレナが法廷通訳をしているシークエンスから始まる本作は、なぜかラストもエレナが通訳をしているシークエンスになる。冒頭で裁判官から「通訳がいらざる意見を述べるな！」と注意されていたエレナは、ラストでは忠実に被告人がしゃべる言葉を通訳していたが、ふと感じた気配で横を見ると、そこに父親ロレンツォの姿が。すると、エレナは通訳そっちのけで、自分の父親に対する思いを語り始めたからアレレ…。これでは

もちろん通訳として失格だが、娘としては・・・？人間としては・・・？

他方、ロレンツォはそれまで長い間姿をく라마しておきながら、なぜ忽然と娘の職場である法廷に姿を現したの？さらに、もし娘と話したいのなら、通訳の仕事が終わるまで傍聴席で待てばいいのに、いつのまにか現れ、いつの間にか消えてしまったから、さらにアレ？通訳の失敗をどのようにごまかしたのかは知らないが、仕事を終えたエレナが急いで裁判所の内外でロレンツォを探して回ったが、ロレンツォはどこにいったの？そう思っていると、広場の真ん中の噴水で一人座っている男が・・・。

もちろん、エレナはその側に腰を下ろしたが、そこでの父娘の会話は全くなし。しかし、その手は・・・なるほど、これが現代を描く“21世紀のネオレアリズモ”なのか！このラストの余韻をしっかり味わいたい。もちろん、この父娘関係の復活に楽観は禁物だが・・・。

2019（平成31）年2月26日記